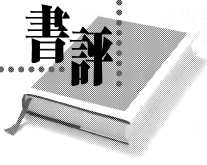


書評



Benjamin J Sadock, Virginia A Sadock, Norman Sussman 著
山田和男, 黒木俊秀, 神庭重信 監訳

カプラン精神科薬物ハンドブック 第4版

エビデンスに基づく向精神薬療法

神田橋條治

参ったなあ。「ハンドブック」の邦訳は「便覧・手引き」であり、原題にはご丁寧に pocket という冠までついている。臨床家はせめてこのくらいの知識は参照しながら日常臨床に携わってほしい、の意であろう。本文中に散見する文言から、著者たちがその心積もりで編さんしているのは確からしい。なのに、不勉強な老医である評者には、本書の7割が新知識である。あるいは青壮年の世代には既知の知識群なのかもしれない。自身で手にとって確かめてほしい。

本書の特筆すべきは、監訳者の1人 神庭重信先生の序にあるように、有害作用と薬物相互作用についての情報が充実していることである。多忙な臨床家は自分が劇薬に類す危険物を生体に注入していることを失念しがちである。また薬物相互作用についての知識が乏しいと、増強療法 augmentation などと言い訳して、己が不明の告白のごときカクテル処方を書き散らす結末となる。評者にとっては、有害作用と薬物相互作用についての記述だけでも、いささか高価な本書の定価に見合う情報である。本書はEBMに依拠して記述されている。思えば、本書を際立たせている上記2つの分野こそは、EBMが得意とするジャンルである。その点臨床家にとって、治療法選択への助言であるアルゴリズムとは対極の位置にある。対立的ではなく相補的關係である。そして、両者を連結して使いこなす技術が臨床の知である。臨床経験の

少ないうちはアルゴリズムと本書の知識が直結したような構図であり、臨床経験が増えると2枚の皮に挟まれたアンコがどっさりの最中になる、とイメージしてみると臨床修練への意欲が高まるかもしれない。

次に挙げるべきは、いまだ身体的基盤が解明されていないほとんどの精神症状の治療へ、現時点で明らかとなっている薬理学的作用機序の側から肉薄したいとの熱情である。いまだ不可能な領域への挑戦であるしEBMに依拠する立場なので、言明はしばしば歯切れが悪いが、それがかえって誠実で手堅い雰囲気を生み好感をもたらし。毎日、抗幻覚作用、抗妄想作用、賦活作用、抗不安作用などの指標で薬物を選択する作業は、サプリメントを選択する素人の思考レベルと同じ水準なのだ、メカニズムや作用機序を知らないまでも、せめて知ろうとする意欲ぐらいいは持っていないと、とても恥ずかしくてプロとは言えないよなあ、と嘆いている人々への良書である。カルシウムチャンネル阻害薬、ハーブなどまでとり上げられているのは治療薬選択の幅を広げてくれる。

薬名や投与量など、米国と日本との違いについて、訳者により随時注釈が添えられている。それを含め、貴重な知識の紹介に力をはらわれた訳者みなさまにお礼申し上げます。

(伊敷病院)

●A5 380頁 2007 定価6,090円(本体5,800円+税) MEDSi